

産地、今(8)

リレー随筆

大分県の根深ネギの産地から

(大分県農業技術センター植物防疫部 吉松英明)
兼 営農指導課病害虫専門技術員

The Introduction of Welsh Onion — Producing District in Oita. By Hideaki YOSHIMATSU
(キーワード：産地だより、大分県、根深ネギ)



千拓地でのネギ栽培風景

大分県は沿岸平坦部から標高 800 m の高冷地まで標高差のある地形を有し、県下全域でそれぞれの地域特性を生かした多種、多様な野菜の栽培が行われている。施設野菜ではこの 10 年間で生産が大きく拡大し、イチゴ、トマトなどの施設栽培面積は急激に増加している。露地野菜ではキャベツ、ハクサイなど重量野菜が減少し、全体としては生産量が減少しているものの、一部の品目では平坦部から高冷地まで栽培時期を異にするリレー栽培も行われている。特に近年は根深ネギの栽培に力が入れられており、大規模経営が増加している。これまでは、冬季を中心として周年出荷体制がとられ、夏から秋にかけては出荷量が少ない端境期であったが、中山間地から高冷地へと栽培地域が拡大し、年間を通じて安定的に供給するための産地形成が確立されてきた。

Ⅰ 根深ネギの主な病害虫

大分県国東半島の西側に位置する西国東地域の約 400 ha とした広大な千拓地では、古くから根深ネギの栽培が行われている。近年では前述のとおり、周辺の宇佐地域や玖珠九重地域などの中山間地から高冷地にかけての地域において栽培面積が拡大している。

ここでは西国東地域の千拓地を中心に、近年問題となっている病害虫とその対策および取り組み状況について紹介する。

1 ベと病

べと病は主に春先から梅雨期に発生する病害として従来から防除が行われてきた。防除薬剤としてジネブ水和剤、マンゼブ水和剤が従来から使用されてきたが、ホセチル水和剤、アゾキシストロビン水和剤などの治療効果のある薬剤がこれに加わり、現在防除が行われている。しかし、昨年および本年においては 3 月

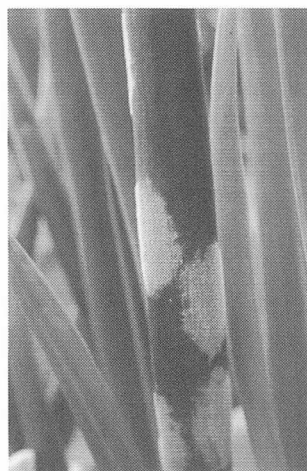


写真-1 ネギベと病

に入り、短期間のうちに急激に発生がまん延し、病害虫防除所から防除督促や注意報が発表されるなど、これまでとはやや異なる発生様相が見られている。そのため防除が遅れて品質低下の要因となっている。これまで以上に本病を対象とした防除の徹底が必要である。

2 小菌核腐敗病

1993 年は冷夏長雨年であったが、その翌年の年明けに収穫する作型で本病は大発生し、葉鞘部の腐敗や裂開による抽出葉の突出など、収量、品質に大きな影響を与え、生産者の生産意欲の低下にまでつながった。本症状の原因については当時不明であったが、後に千葉県で *Botrytis suquamosa* が本病の病原菌であることが明らかにされた。その後、大分県でも本症状が千葉県で明らかにされた菌と同一であることが判明した。現地からは本病の防除対策確立についての強い

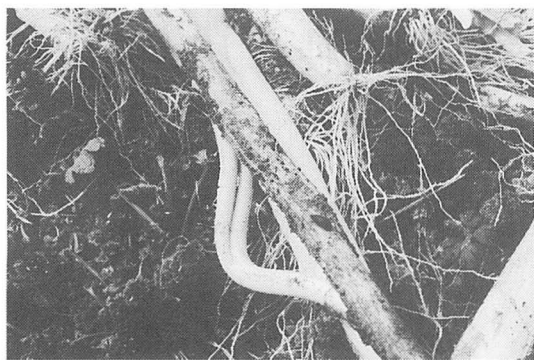


写真-2 ネギ小菌核腐敗病、腐敗裂開部からの抽出葉の突出

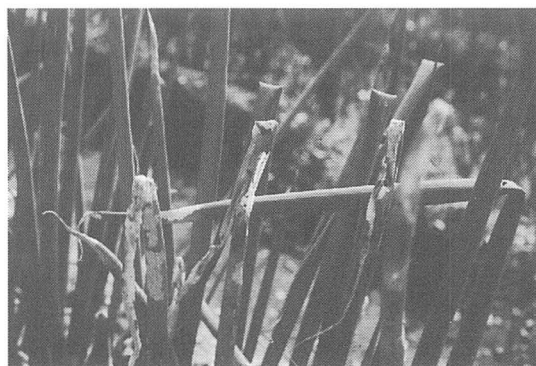


写真-3 ネギシロイチモジヨトウ被害

要望があげられ、農業技術センターを中心に土壤消毒、苗浸漬、生育期散布による防除試験が行われた。その結果ジカルボキシミド系薬剤の苗浸漬と生育期散布を組み合わせることで高い防除効果を示すことが明らかとなった。さらに本病の病原菌には *Botrytis cinerea* も関与していることや、ベンゾイミダゾール系薬剤に対する感受性にも差異があることが明らかとなった。現時点では病原菌は *Botrytis squamosa* が主体であると考えられるが、今後、病原菌の種別の発生割合、発生変動、さらには薬剤耐性菌の発生動向については常に把握しながら注意を払う必要がある。現在ジカルボキシミド系薬剤を中心に散布が行われているが、今後他の野菜類で発生している灰色かび病と同様、薬剤耐性菌の出現も懸念されることから、他系統薬剤との輪番使用が求められる。また、本病は極めて年次変動の激しい病害であることから、数年少発生が続くと現場では防除を怠る傾向が見られる。本病の発生条件をしっかりと把握することが大切であり、今後もそのための発生予察技術の確立も重要である。

3 シロイチモジヨトウ

シロイチモジヨトウは昭和60年に激甚な発生を確認した害虫で、その後も発生量には年次変動があるものの、根深ネギでは重要害虫の筆頭にあげられる。本虫はふ化幼虫がすぐに葉の先端部から葉身内に食入し、内側から表皮を残して葉肉を食害することから、葉液が虫体にかかりにくく、食入後の防除では効果が上がりにくい。また食害による直接減収はもとより、葉の中にたまった虫糞による品質低下と出荷調整の手間の増加も大きい。これらの背景から、農業技術センターで各種薬剤の防除効果の検討を行うとともに、1990～1992年にかけては発生生態の解明と総合防除

技術の確立に取り組み、広範囲の圃場を対象に、性フェロモン剤のピートアーミルア剤を用いた交信かく乱法による防除法について現地実証し、大きな成果が得られ、現地でも使用されるようになった。しかし前述のとおり、シロイチモジヨトウの発生は年次変動が激しいため、少発生が続くとその防除意識が薄れることに加え、異なる出荷組織が混在する現場では広範囲に処理をする本法に対する意識統一が困難なことから、交信かく乱技術による防除も一時停滞した。しかし、農薬だけでは防除が困難なこと、散布回数の増加による労力負担が大きいこと、さらには、環境保全型農業の推進が叫ばれるようになったことから、農薬散布による防除とは異なる本技術が再び見直され、ここ2～3年現地では性フェロモン剤を利用した防除が広範囲で行われるようになり、農薬による防除回数の低減が図られている。

Ⅱ 産地の動き

中国産を中心とした輸入急増による価格の低迷で西国東地域の根深ネギは大きな打撃を受けたが、昨年の4月にセーフガードの暫定発動が行われ、一時安定した価格で生産も一息ついた。しかし、その後本発動が回避され、再び厳しい状況となった。現地では暫定発動が実施されている間に産地改革検討委員会を設置し、産地再生を行うために農林水産省の示した改革メニューに添って検討が行われてきた。現在ある複数の出荷団体間の連携を深め、規格の統一、ネーミング（ねぎっ娘）の統一を図り、市場評価の向上、産地基盤の強化など、輸入物に対抗できる「産地改革」への取り組みの強化を図ってきた。今後も生産者、関係機関が一体となり、これまで以上の高品質な根深ネギの栽培に向け、さらなる飛躍が期待される。